

国連教育シンポジウム
in 徳島

国連をどのように教えるか

1998年8月23日
四国大学（共通講義棟）

基調講演 最上敏樹国際基督教大学教授

主 催 国連広報センター
徳島県高等学校教育研究会社会科学会

後 援 徳島県教育委員会

基調講演

国連をどのように教えるか

国際基督教大学教授 最上敏樹

(総合司会)これより、国連広報センターおよび徳島県高等学校教育研究会社会科学会主催による国連教育シンポジウムを開催いたします。まず妹尾靖子国連広報センター所長代理より、基調講演者の最上先生のご紹介も兼ねてご挨拶をいただきます。よろしくお願いいたします。

(妹尾)国連広報センターの妹尾靖子です。このたび、こうして徳島県高等学校教育研究会社会科学会と共催で国連教育シンポジウムを開催できますことを、たいへん光栄に存じております。また地元で準備をしていただきました先生方と、徳島県教育委員会に厚くお礼を申し上げます。

「国連のさまざまな活動が日々報道される中、学校では国連のことをどのように教えていったらよいのか」。当センターでは、このことについて、多くのお問い合わせをいただいております。現場の先生方と一緒に考えていく必要を強く感じ、教育シンポジウムを毎年行っている次第です。

さて、本日講師としてお招きいたしました最上敏樹先生をご紹介します。最上先生は国際基督教大学教授であり、同大学平和研究所所長をお務めになられております。ご専門は国際法、国際機構論です。皆さま、拍手でお迎え下さい。

(最上)こんにちは。最上でございます。約1時間ほどお話をさせていただきます。私は先生方と違いまして、高校の生徒たちに国連の問題を教えるということを仕事にしている人間ではございません。むしろ自分の研究が先に立っている人間ですので、その点ではたいした話ができるわけではありません。大学生を相手にして教える中に国連という項目が入っているということなのですが、私はこのテーマは力を込めて教えるべきものだと感じております。同時にこれは実に難しいテーマです。とくに日本のような豊かな国で国連のことを教えるのは、いかに難しいかということを感じております。

国連というものについて何を教えなければならないかということに関して、ひとつのエピソードからお話したいと思います。きょうお集まりの先生方は社会科の先生が多いと思いますので、ご存じの方も多いと思いますが、ハラレという地名をお聞きになって、すぐにどこかということをお出しせる方はどれくらいいらっしゃいますでしょうか。ひょっとしたら、いらっしゃらないかもしれません。アフリカのやや南部のほうに、ジンバブエという国があります。昔ローデシアと言われていた辺りですが、その首都がハラレというところですよ。

その国の外務省の招きで、5、6年前にここへ国際会議で参りました。町中をタクシーで走っておりましたら、このハラレの真ん中に「UN」と描いた大きな看板が出て矢印がついているのです。「UN」というのは申しあげるまでもなく国連のことです。矢印がついていますので、この矢印の通りに行けば向こうに国連があるということらしい。しかし、私は商売柄、国連の出先機関が世界中のどの辺りにあるか、だいたい頭の中に入っているのですが、ハラレに国連の出先機関があるという記憶はありませんでした。

ちょっと話が脱線しますけれども、ワルシャワで私がよく泊まるホテルの目の前に大きなビルがあって、屋上に真っ赤な色で「PKO」というネオンサインを出しているところがあるのです。ワルシャワで平和維持活動を行っているのだらうかと思って、聞きましたら、それはポーランド語でポーランド何とか銀行の略なんだそうです。

そういうわけで、「PKO」とあっても国連の平和維持活動だと思ってはいけない、「UN」と書いてあっても国連だと思ってはいけないという学習効果が多少ありまして、運転手さんに聞きましたら、やはり「あれは国連だ」と言うわけです。あれっと思い、「その国連では何をやっているのですか」と続けて聞きましたら、運転手さんはたどたどしい英語で、「あそこに行ったら食物がもらえる」と言うのです。

そうなのか。じゃ、やっぱりこれは国連の出先機関だらうと思って後で調べてみましたが、ローマに本部のある国連食糧農業機関の出先機関がここにあったのですね。さらに「このハラレの人はこの国連のことをどう思っていますか」と聞いたら、「たいへんありがたい」という話なのです。「食物、着物、それからときには小学校の先生が来ることもある」ということで、私は非常に印象に残りました。そういうことは日本では、絶対にありえないわけです。

国連の出先機関があって、それがその町での食糧の最大の供給機関の一つであり、衣類の最大の供給機関の一つであり、ときには寺子屋に先生を派遣してくれる機関である。こういうことは、ジンバブエのような貧しい国だからこそ起こることであって、日本でなら

ば起こらない。つまり日本のような国にとっては国連というものは実感しにくい組織なのだろうと思うのです。そこで大事なことは、世界中を見回してみると、60億近い人口のうち15億以上は実はジンバブエのような状況で暮らしているということです。そして世界中の大多数の人間がそういう状況の中で暮らしているならば、やはりそういう国連を必要としていない国でも、その活動はきちんと知っておかなければいけないだろうと思ったわけです。

こういう国連のことを日本ではあまり経験できない。この種の国連のことを私は、「手に触れることのできる国連」と呼んでいます。我々が国連という言葉を開きますと、ついついニューヨークのあの背の高いビルのことを考えたり、安保理での言い争いのことを考えたり、そういうことしか想像しません。しかし、それは国連の極めて一部であって、国連の大部分は手に触れることのできる国連です。たまたまそういう手の触れることのできる国連に接する機会が少ない。幸か不幸か、日本のような国にいとその大切さがなかなかわかりにくい。より大切だと思われる、手に触れることのできる国連ということを私は考えて、それを忘れないように自分でもしたいと思っていますし、学生たちにもそのことは力を込めて教えるようにしています。

国連というものをどういうふうに教えていくのだろうか、あるいはどういうふうに見ていったらいいのか。まず国連を教科書的に解説するとすればどうなるか。もっときつい言い方をすれば、退屈な国連の授業というものはどうやったらいいかというところから話を始めたらいいと思うのです。退屈な国連の授業の典型といますのは、（日本の大学の大部分でやっているのはそうですけれども）まず国連の組織図、機構図というものを出示します。国際司法裁判所、総会、経済社会理事会、事務局、安保理、信託統治理事会があって、各々の下にこれだけたくさんの下部の機関があってということを機能別にいろいろ説明していく。こういうことをやりますと、いかにも体系だてでいて、何となく一見わかったような説明になります。

しかし、とくに日本のように国連から遠い国に暮らしている人間にとっては、こういう図だけを頼りに授業をやられてもおそらく何のことやらさっぱりわからない。ますます自分には関係のない話になっていくだろうと思います。ここから話を始めてはいけないのだということに気付くのに、私も実は何年かかかりました。大学生が相手ですから多少はわからないところがあっても、体系的に説明しなければならぬのだと考えていたのです。しかし、やはりそうではない。それよりもまず、人類の長い歴史の営みの中で、こういう国連のような機構が生まれてきた。それが単なる偶然ではなくて、生まれるべくして生ま

れてきたのだということを引きちんと理解させる。それがまず第一の点でしょう。「人類の長い長い歴史の営みの中に国連もあり我々もあるのだ」ということを、どう実感させるかということが大切なのだらうと思います。

それからもう一つは先ほど申し上げましたように、我々が手に触れる機会は少ないかもしれないけれども、世界中のあっちこっちで国連は今や手に触れうるものになっている。そういうことに実感を持つということはどこで疑似体験するか。バーチャルリアルティーズですね。そういう実感を学生にどうやって持たせるかということが、次に大切になってきます。

国連は、歴史の流れから見ても、世界の現状から見ても必要なものである。それをわからせる資料とか証拠というものはたくさんありますので、それをまず伝える。同時に国連というものは決して今ある状態で完成されたものでなくて、まだまだ欠点が多い、不十分な点も多いものだということを伝えていかななくてはなりません。

国連が不十分なものだということに関して、最近、国連をしきりに非難している国の一つにアメリカという国があります。非常に不幸なことに、ここでは日本だけではなく、世界のマスコミが関わっているのですが、アメリカが国連を自分の都合の良いように利用すると、マスコミが国連に目を向ける。また、アメリカが国連を頭から無視したときに国連をからかうために、マスコミは目を向ける。

たとえば1991年の湾岸戦争です。アメリカが国連を利用して戦争を始めようとする。そうするとマスコミが、「国連が戦争をやった」と言って大騒ぎをする。逆にまた最近アメリカが爆撃を行いましたけれども、あの場合のようにアメリカが国連というものを頭から無視した態度を取ったときにも、「ほら国連は何もできないではないか」と言って、マスコミは国連に目を向ける。こういう目の向けられ方をしていますと、国連というのは道化役者になってしまいます。でも国連の実態というのは、実はその真ん中にあると思うのですね。アメリカに徹底的に利用されてしまう国連と、アメリカに徹底的に無視される国連と、その真ん中に限りなく豊かな国連が広がっているというのが、我々国連専門家の最もバランスの取れた見方だらうと思います。

ここ数年の浮ついた現象だけで国連というものの価値が決まるわけではありません。どういう歴史をたどってきたのかということのスライドをお見せしながら、少し解説をしておきたいと思います。

これはご存じの方も多いと思いますが、ニューヨークにあります国連の本部です（写真1）。川の側から建物を見たものです。できたころは結構な高層ビルでしたけれども、今や

決して高層とは言えないようなビルになっています。

次は、国連総会の議場です(写真2)。フロアーに座っているのは各国の代表で、その周辺のほうには傍聴席などもある。演壇は、議長、副議長、事務総長といった人が座っています。

その次。これが日本では実に頻繁によく出る、安全保障理事会の議場です(写真3)。決してこの安全保障理事会だけが国連の主役だということではないのですが、やっぱりマスコミの報道というのはその国の体質やら関心やらを表すのか、日本ではどういうわけかこの写真がいちばんよく出てくるような気がします。重要な場所ではありますけれども、ここだけが国連なのではないということもよくわかっておかなければいけません。

その次。これは遠く離れて、オランダのハーグにある国際司法裁判所です(写真4)。今ちょうど判事さん全員が並んで座っているところで、その中に、以前東北大学で国際法の教授をしていらした小田滋先生がいます。唯一の日本人です。

少し歴史を遡ってみます。これは1941年に大西洋上で、当時のルーズベルト米大統領とチャーチル英首相が会談をしたときのものです(写真5)。ずいぶん物々しいです。軍艦の上でやっているのですが、乗組員が観客になっているのでしょうか。1941年8月ですから、

写真1



写真2



写真3



写真4



日本がアメリカとの戦争に入る、パールハーバーのさらに前ですね。そんな時期です。この時期に何をやっていたのかというと、ルーズベルトとチャーチルは戦後の世界構想をこの時点から練り始めていたのです。我々国連研究者の間ではこのときの会談が国連の起源だということになっています。

このときに2人は大西洋憲章というものを発表しました。国連という言葉は出てこないのですが、この大西洋上の話し合いの中では、明らかに国連というか、ある種の国際機構を作り、それによって平和を守っていくのだという構想が既に出ている。それで1941年8月が、国連を作る準備、出発点になったのだと考えられています。パールハーバーの奇襲がある4ヵ月も前にこんなことをやっている国を相手に回して、戦争に勝とうと思ってもそれはほんとうに無謀な試みだったと思います。

次は、これが第1回目の国連総会の模様です(写真6)。演説をしているのはアトリーだったと思います。イギリスの首相だった人です。ご覧になってすぐわかると思いますけれども、さっき見た総会議場とはずいぶん違います。そうです。これはロンドンなのです。国連のことを多少お調べになった方はご存じだと思いますけれども、国連は最初はロンドンで開かれて、次はパリで開かれてと、あっちこっち間借りをしながら点々としました。

本日配布されております徳島県の高校生のアンケートを見ると、「国連の本部はどこですか」という質問に対して、いちばん多い回答はニューヨークなのですが、第2位がロンドンになっています。生徒たちはひょっとしたらこのことを知っているのだろうかという気になったのですが、いかがなものでしょうか。そうしますと3位にパリというのがあってもおかしくないような気もするのですが、まあ中途半端に勉強した生徒がいたのかもしれませんね。

次は、ニューヨークの北のほうにあるハンターカレッジという大学に置かれた国連の本部の模様です(写真7)。ハンターカレッジというところは最初のころ安全保障理事会を開

写真5



写真6



くところとして使われたのですけれども、このことも割合知られていない。大部分の人がニューヨークの真ん中にある国連が最初からあったものだとばかり思っている。さっきのように最初の総会がロンドンで間借りをしたとか、最初事務局やら安全保障理事会がニューヨークのずっと北のほうで間借りをしながら狭いところでやっていたのだということを知っている人はあまり多くない。ニューヨークでも知っている人は少なくなっています。これはそのころの貴重な写真です。

次も最初のころの写真で、総会が行なわれた場所ですね(写真8)。ニューヨークのやや南、東側です。ニューヨークに行かれた方はケネディ国際空港に着陸した経験もおありかと思いますが、その空港からそれ程遠くないところになります。この建物の中で総会が開かれたこともあるのです。

その次。これもニューヨークの、かなり北になります。運動場があります(写真9)。レークサクセスというところなのですが。ここでもやっぱり1946年の夏ごろから、しばらくの間国連の本部が置かれていたという場所です。まだ建物が残っています。この後さらに4年ぐらい待たなければ今のマンハッタンの真ん中にある国連の建物というのはできません。これはそのころ、お金がなくて、苦労していたころの国連の写真です。

ということで、国連にはこういう歴史があるのです。人類の長い歴史の中で、という大きな話を先ほどしました。国連については批判をしようと思ったらいろんな批判が可能なわけです。たとえばボスニアでの紛争を食い止めることができなかったとか、ルワンダで虐殺が起こったけれどもその犯人をきちんと処罰もできないでいるとか、どこその

写真7



写真8



写真9



飢えを救えないとか、環境破壊を食い止めることができないとか、さまざまな批判が聞こえてきますし、そのかなりの部分は正しいということもあるのですが、ただやっぱりこれだけの機構を作ったというのは、人間の営みの成果だと思えますし、これはこれで大事にしなければいけないのではないかとというのが私の考えです。

もう3年前になりますけれども、1995年というのは国連ができて50周年という記念の年でした。ニューヨークの本部でも大きな記念行事が開かれましたけれども。そのときに私はいささか臍曲がりなのですが、「国連200年の歴史」という論文を書いたことがあるのです。ちょっとしか知らない人は、いったいこの男は血迷ったのではないかと思っただろうと思うのです。できてから50年しか経っていないのに、その200年の歴史を振り返ろうということを表題にした論文を書いたわけですから。

なぜそういうタイトルを付けたかといえますと、この1995年というのが、有名なドイツの哲学者カントが「永遠平和のために」という短い本を書いてからちょうど200年目だったのです。カントは永久に続く平和のためにはある種の国際機構が必要だということをその本の中で言いました。一つそこで注目しなければならないことは、カント以前にも同じようなことを言った人がいたということです。何人もいたのですが、その多くは今の言葉で言うと、世界連邦を作ろうという考えでした。それに対してカントは、世界連邦なんていうものを作ると、結局大国が小国を思うがままにする機構になってしまうからそれはやめよう。それはやめて各国が主権を平等に持ったような機構、主権を平等に持った国々が集まる機構を作ろうということを考えました。それをある意味で忠実に再現しているのが、今の国連の組織なのです。

一気に世界連邦とか、世界政府といったものはできなかった。これについてはよかったか、悪かったか、評価の仕方は分かれるところです。つまりカント以前の人たち、カントの後もそうなのですが、その人たちが平和というものを考えるときに何よりも必要だとしてきたのは、主権国家をどう乗り越えるかということなのです。主権国家というものがあふ限り、国々は喧嘩し合う。そうすると主権国家を乗り越えるような強い力を持った機構をその上に作らなければ戦争というものはないであろう。平和な世界というものは来ないだろうと考えたわけです。

でも実際には、そう簡単にはいきません。世界連邦を作れとか、世界政府を作れと口で言うのは簡単ですが、実際にそれをやろうとしたら簡単であるはずがない。そこで世界連邦とか世界政府といったものを作るかわりに、すべての国家が、世界中の国々がバラバラでいないように、それを結びつなく制度だけでも作っていかうでないかということで、い

わば世界政府の代替品として国際機構というものが出てきます。

これは実に歴史が新しいことで、今で言うような国際機構が本格的に世界に現われ出すのは 世界と言いましてもヨーロッパだけですが、19世紀の中ごろです。ですから国際機構というものはまだせいぜい1世紀半ぐらいしかこの地球に存在していないものなのです。国際機構というものが、中途半端かもしれないけれども つまり世界政府にはなっていないかもしれないけれども とても大事なものなのだという認識が高まってきて、いわば一つの頂点として国際連合というものができたのです。

それは大戦の後始末として生まれてきます。この世紀は2つの桁外れの、大きな戦争を経験しました。一つは第一次大戦です。これが終わった後、平和のための機構ということで国際連盟が作られた。ただ国際連盟は第二次大戦を防ぐことができないままに、何もできなかった機構であるかのように姿を消してしまいます。第二次大戦が終わった後に、国際連盟よりももっとまともな、しっかりと働いてくれるような機構を、ということで国際連合というものが出来上がる。しかし、この国際連合も、やっぱり世界政府ではありませんでした。世界中の国々の主権を全部吸収してしまうような機構では決してない。あくまでも主権を持った加盟国の意思を聞きながら、その意思を合わせながら活動していこうというものです。

このことは国連のことを何にも知らない人に、まずいちばん最初に噛んで含めるように言ってあげなければならないことの一つです。つまり国連は世界政府ではないのだということ。国々に命令を出せるような存在ではない。例外的にそういう場合もあることはあるのですが、原則的にそういうことはない。ですから国連とはどういう機構かということをお話するとき、185の国の集まりだという言い方で教えることがありますが、大事なのはその185という数のほうではなくて、185の主権国家の集まりだということなのです。185の国々それぞれが主権を持っていて、「国連の言うことなんか聞かないよ」と言ってしまったら、もうそれっきりということも起こりうる。いかに正しい政策であっても、そういう国々に対して嫌でも無理にやらせるという強制力はほとんどの場合持っていない。

しかし、国連は世界政府的なものを全く持っていないのかというと、これまた実はそうではなくて、ある部分で国連は世界政府的な強いものを持っている。これは安保理です。とくに安保理の中の常任理事国です。国連憲章の第7章をお読みになったことがある方も多いと思いますが、この第7章には、ある国が他国を侵略をしたとか、侵略の一步手前として、平和に対する脅威になったとか、平和を破壊したとか、そういうことをやった場合に、国連は軍事力を組織してその国に対して攻撃をするということが想定されています。

この場合の国連というのは安保理です。国連のことを話すとき、国連の中の誰ということをしきんとおさえながら話さなければなりません。加盟国に対して軍事攻撃をするだけの権力を与えられているのは安保理だけです。他のどの機関もそういうことはできないのです。その意味では、実は国連は全体としては世界連邦ではないけれども、中をよくよく見るとやっぱり世界政府みたいなものが入っているのですね。

その機関が何のコントロールもなしに強い権限をふるいだしたらいったいどうなるのだろうか。たいへん恐ろしいことになるのではないかということ、私などはちよくちよく考えることがあります。国連が作られたときにはそこまでは心配していなかった。日本やドイツがまた悪さをするかもしれない。この国々が悪さしたら、それに対抗できるだけの態勢を整えておこうよということで、国連憲章の第7章というものが作られたのですね。

ただ歴史というものは非常に皮肉なもので、こういう国連の強い仕組みの対象に想定されていた、日本やドイツといった国が、戦後あっという間に優等生になってしまったのです。世界中にたくさん国がありますが、日本やドイツぐらい簡単には侵略に走らないだろうと信頼されている国もそう多くはないだろうと思います。それぐらい優等生になってしまったものですから、国連にとってはいわば大きな仕事がなくなってしまった。屋根の上へ上がって梯子を外されたような状態になってしまったとも言えるわけですね。

戦後世界では日本やドイツの侵略というのは起きませんでしたけれども、その代わりに内戦やら小さな地域紛争やらいろいろなことが起きてきました。そのときに国連が国連軍というものを作って「みんなで懲らしめに出かけるぞ」と言っても、そうはいきません。だいたい小規模な紛争ですから、もっと温和な方法でやったほうがいいだろうということになった。そこで始まるのが国連の平和維持活動です。

国連の機能はいろいろあります。平和と安全の維持ということでそれが大きな機能の一つになっていますから、国連の平和維持活動というものもやっぱり国連の大事な活動の一部として見ていたほうがいい。これから何枚かスライドをお見せします。国連の平和維持活動というのは単純な軍事行動ではないのだということをご理解いただきたいと思って、これが国連の平和維持活動なのだという特徴的な写真を選んでみました。

これはエジプトの砂漠地帯をパトロールしている旧ユーゴスラビア出身の部隊です（写真10）。歩いてパトロールしている。平和維持軍の活動というのは、明けても暮れてもこんなことをやっています。もちろんたいへん危険なところですから、のんびり散歩を楽しんでいるのではなくて、どこから銃弾が飛んでくるかもしれないという緊張感の中で歩いている。持っている武器はライフル1丁だけ。古典的な平和維持軍の装備です。

次は、第2代国連の事務総長、ダグ・ハマースホルドです(写真11)。コンゴで平和維持活動が展開された際、その平和維持軍の視察にきたところです。このハマースホルドという人が平和維持活動のうち、軍隊を使った平和維持軍というやり方を最初に始めた人です。この写真が撮られてから、ちょうど1カ月ぐらい後、彼は事故で殉職しました。コンゴ、もうちょっと南のほうでですが、殉職した「ミスターPKO」として知られている有名な事務総長です。

次も国連の平和維持軍の兵士です(写真12)。エチオピア人の兵士です。これもハマースホルドの写真と同じように、このときたいへん大きな戦闘がありました。平和維持兵が現地の子どもを抱いている光景です。

次はキプロスです(写真13)。1964年からずっと今に至るまでキプロスでは国連の平和維持軍が常駐しています。トルコ系住民とギリシャ系住民の間で戦争が始まるかもしれないという間に入って、戦争を防止しています。こういうふうに国連が間に割って入ることがなければ、この島ではたいへんなことが起きてしまう。写真は、フィンランドの銀輪部隊ですね。自転車でこうやってパトロールをする。およそ近代の軍隊には程遠い装備

写真10



写真11



写真12



写真13



で、体を張ってやっている人がいるのだということです。

次は、こういうきれいな写真もありますよということで選んでみました(写真14)。ちょっと観光絵葉書のようなのですが、フィンランド人の部隊。エジプトでの平和維持活動です。これは監視地点なんだそうですが、何人かが立って常に紛争当事者の動きを監視している。戦争がまた始まりそうになったらそれを本部に報告して、当事者に対しては「やめなさい」ということを言う。そういうことをやっている人たちです。

次は、シリアです(写真15)。シリアの山岳地帯では雪が降りますから、中にはスキーを履いて平和維持活動をやらなくてはならないという場合も出てきます。この部隊はオーストリアの部隊ですから、スキーはお手のものですね。シリアのゴラン高原というところは、シリアとイスラエルの間で、しょっちゅう対立があった場所です。夏は砂漠でたいへん厳しい。そして冬は雪が降る中で監視活動をしている。

次は、最近のはのんびりした活動ばかりでない、ずいぶん難しい活動も増えてきたという例の一つです(写真16)。ホンジュラスで行った活動の写真なのです。国連平和維持軍が紛争当事者から武器を集めて、武装解除するというのをやりました。この武装解除というのは、なかなかそれに応じない紛争当事者がいたりして結構危険な仕事です。この写真は、紛争当事者が自発的に自分たちの兵器を差し出してくれて、その兵器を解体しているところです。持ってくる兵器はたいしたものではなく、古めかしい兵器なのですが、それでもこうやってきちんと処理しなければ平和維持活動をやったことにならない。こういう鉄工所の工員のような仕事をしている平和維持活動の兵士もいます。

写真14



写真15



写真16



最後にもう1枚。これは平和維持活動がさらに、いささか強力になった例です(写真17)。この春以来話題になっているイラクでの大量破壊兵器の処分のための特別委員会です。国連から派遣された委員会が、ミサイルの発射基地になるのではないかと疑われているところを査察しています。左側に人が固まっていますが、主に国連の職員たちです。査察して、こういう施設が軍事的に危険だということになったらその破壊を命じる。国連の歴史の中では極めて珍しいくらい強い権限を持った委員会の活動です。

ということで、平和と安全の維持という大きな仕事があります。ただそれは、極めてわずかな例外を除けば、それほどたくさんの方ができるわけではない。やっぱり基本的に加盟国の意向を確かめながら、そしてそれを尊重しながらやるのだということです。

さて、なぜ国連は際限なく批判されるのか。これについて駆け足でお話したいと思います。国連批判にはしばしば誤解があります。一つ目に、国連が世界政府でないということに対して不満を感じる人がときどき現われるということ。国連はボスニアの戦争をやめさせることができないではないか。あるいは多国籍企業が横暴なことをやっても税金さえとることもできないではないか。それやこれや、ちゃんとやっていないと言うのですが、実は国連にはそういう権限はほとんど与えられていないのです。与えられていないのに世界政府が必要だという人が現われ、その人たちから無理な批判も出てくる。これは、国連を批判すべきではなくて、世界政府を作りましょうという運動を始めるべき事柄なのです。

2つ目は逆に、国連のごく一部が世界政府的な強い権限を持っていることに対して批判が強く向けられること。その一つは安保理です。安保理は武力行使の権限を持っている。それから安保理の中の常任理事国が拒否権という強い権限を持っている。まるで特権階級扱いでおかしいのではないかと、という批判が生まれるのです。それから経済金融の面では国際通貨基金(IMF)と世界銀行とかいった金融機関が国々にお金を貸し付けるときに、「お宅の国の経済状況をああ変えなさい、こう変えなさい」という微に入り細にうがった細かい命令を出すことがあります。「賃金の引き下げをしろ」とか、「銀行の金利はこうしろ」とか、「政府支出はこれだけに抑えろ」とか、ずいぶんいろいろな細かい命令を出す。こういう命令に対して反発を感じる国から、国連はいつからこれだけ我々に対して威張

写真17



るようになったのだという批判を受けることもある。

3つ目に、国連の中にもいろいろな部門があるのに、どれもこれも一緒にして国連が悪いという言い方をする。たとえば国連というのは加盟国が作っている部門と、加盟国ではない国際公務員が作っている部門とではまったく性格が分かります。

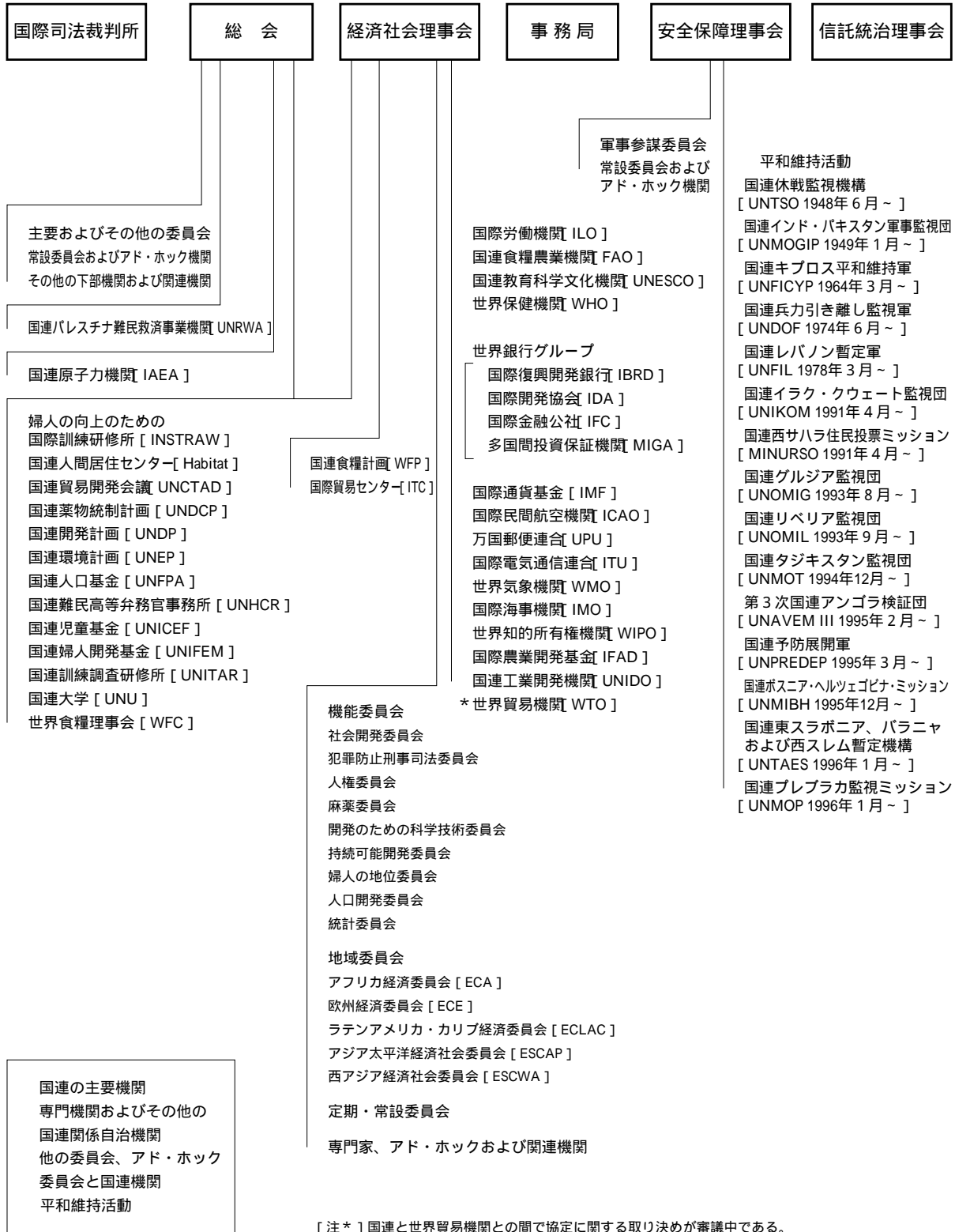
国連機構図をご覧ください(国連機構図、次ページ)。総会、経済社会理事会、安保理、信託統治理事会。これは国連の加盟国の代表が作っている機関です。つまり、それぞれのメンバーがそれぞれの国家主権を背後に持っていて、国益を実現するためにこの機関に集まって相談する、あるいは物事を決める。そういう機関です。それに対して事務局というのはアナン事務総長を初めとして、どの職員も国の代表という資格で国連の中で働いているわけではありません。もちろんそれぞれの国籍というのは持っていますが、たとえばアナンさんはガーナの国益のために働いてはいないし、それは国連憲章上も絶対に許されないことです。中にはそうする人もいて困りものですが、例外的です。ふつうのしっかりした職員、大部分の職員は自分たちが加盟国の代表ではない、違った立場で活動しているのだということを非常によくわきまえています。

国連がある場所で武力行使をするかどうかを決めるのは安全保障理事会です。安保理がこう決めた、ああ決めたという時に事務局の職員たちはそれに対して何にも言えないわけです。自分たちがその決定に加わるわけではない。これはアナン事務総長であってもそうです。安保理が決めると言ったときに、アナン事務総長は、個人的には意見を言うことはあるかもしれませんが、決定に加わるわけではない。そうしますと、国連が武力行使をしたとかしないとかそれはどういうわけなのだからと言って、アナン事務総長以下の事務局を非難するというのはとてもおかしい話だということになるはずなのです。

それから国連がある場所で難民を十分に助けないというときに、事務局が非難されるべきなのかどうか。ひょっとしたら予算の配分を決める総会が、難民を助けるための予算配分を十分にしなただけかもしれません。こういう話はたくさんあるわけです。つまり、国連がおかしいぞというときは、国連のどこがおかしいのかをはっきりさせなければならない。現場で不真面目にやっている人たちがおかしいのか。それとも現場は真面目にやっているのだけれども、その現場に十分なお金や人員を与えないという決定をした総会のほうがおかしいのか。あるいは国連が戦争をやるような場合、その戦争をやることを決めた安保理がおかしいのか。そういうことをきちんと見定めなければいけないだろうと思うのです。

事務局に関して言いますと、今どんどん事務局の人員やポストが削減されていますが、

国際連合機構図 (「国際連合の基礎知識」
国連の主要機関 [世界の動き社、1997年刊行] より)



[注*] 国連と世界貿易機関との間で協定に関する取り決めが審議中である。

これはあまり好ましいことではないと思います。一昨日まで高校野球をやっており、満員の甲子園球場が映っていました。こういうのは職業病みたいなものなのですが、5万5千の観衆が入っているとすると、今世界中の国連の事務局、あるいは国連関係の職員を全部集めてもまだ空席が出るのだなと思うのですね。国連の職員というのは国連の関連機関の職員も全部合わせてですが、どれぐらいか皆さんご存じでしょうか。世界中で事務局の仕事をしている職員の数、国際公務員の数はいちばん最近の数字で5万3,300人です。ちょっとした地方公共団体の職員数に毛の生えた程度の数でしかない。その職員たちが世界中で貧困の現場にもいるし、教育の現場にもいる、環境問題の現場にもいる。こんな乏しい人数で世界中のありとあらゆる問題をやっているわけです。その人たちを全部集めても甲子園球場をいっぱいにするのでできない程度の人数しかいないというのが国連の現状なのです。

国連には批判されるべき点がたくさんあると思いますが、国連の中のどこを批判するのか。加盟国代表の集合体を批判するのか、それとも加盟国代表ではない人たちがやっていることがダメだということなのか。それをまずきちんと分ける。それから加盟国代表がやっていることの中で、安保理で特定の国だけが勝手な事をやっているということを批判するのか。それとも総会というすべての加盟国が集まっている機関が、全体としておかしくなっているという事を批判するのか。そういうことも分けなければならない。

まとめに入りますが、国連というのは何度も申し上げておりますように、国連のある部分が過ちを犯す事もある。確かに過ちをこれまでも犯してきたこともあるし、うまくいっていないところもたくさんある。批判すべき点は常にあるのですが、ただ批判をするときには、少なくとも、これまで申し上げてきたような国連についての最小限の正確な知識をもとにして、正確な批判しなければならない。

それからもう一つ。批判をするのであれば、それはアメリカの一部の国会議員が言っているように「国連など壊してしまえ」という乱暴な批判をするのではなくて、この後の次の世紀につなぐために国々の結びつき、あるいは人々の結びつきという目標だけは失ってはならないということなのです。

国際機構が作られ始めて1世紀半。ここにはやはり、国々はバラバラに生きていくことはできない、人々もバラバラに生きていくことはできない、という現実がよく反映されていると思うのです。国連のような機構が全然なくてもかまわないと言う国々は、おそらく世界中を探してもほとんどないだろうと思います。何らかの形で結びつなぎというものを必要としています。

大事なことは、その結びつなぎの在り方がどれほど良いものであるか、どれほど多くの国々やどれほど多くの人々にとって良いものであるか、ということだろうと思います。結びつなくとも、ある特定の国が権力的にみんなをつなぐということをやっていたら、いつかは離反してしまいます。ですから同じ結びつなくにしても、お互いの同意があってなされるべきでしょう。ついでに言うならば、国々だけではなくて、人々も結びつなされるべきだということです。

私の評価している政治学者にノルウェーのベイという人がいます。この人は自由な良い世界というものはどういうものかを構想した良い本を書いています。その中で彼が強調していることの一つは、人間には動かしがたい連帯欲求というものがある、ということです。人々と連帯して生きずにはいられない。孤立しないで、人々と連帯しながら生きたい。この連帯欲求をどう生かしていくかということがとても大事なことなのだ、と云うのです。

ベイの言う連帯欲求というものを私なりに言い換えた言葉が、「結びつなぎ」ということです。そのために人類がいろいろな形で試行錯誤していく。その一つの頂点がやはり国連なのです。それが不完全であるならば、どうすればより良い結びつなぎができるか、という線で考えていくべきだろうと思うのです。そのときに、国々も人々もつなげていくのだということです。

こう考えた場合のカナメの一つに、事務局というものがあるわけです。事務局にも仕事の能率が悪い人がいたりいろんな問題があるのですが、とにかくこの国連という大きな機構の中で、どの国の主権も背負わず、どの国の利害も国益も代表してない部署があるというのはたいへんなことです。国連という場で国々が結びついている今、その外側に、世界中あちこちで人間の結びつなぎというのが出てきています。いわゆるNGOです。貧困、平和、環境、いろんな問題で国境を越えた人間の結びつなぎというものが生まれてきている。そこで大事なことは、国連の外で発達しているNGOと国連とがどう関係を持つかということです。「国連は上級外交官が集まっている場所だから、そんな一般の民衆がやっていることと関係がない」と言って済むかということそうではない。

なぜそう申し上げるのかと言いますと、このことがまさに事務局という存在に関係するからです。この事務局というのは、世界中あっちこちの現場で働く出先機関を持っていて、その出先機関からジンバブエの例のようにいろんな食糧が配給されたり、毛布が配給されたり、寺子屋の先生が派遣されたりしています。そういうふうに現場で作業している国連というのは、実はNGOと同じことをやっているわけです。国連は安保理で戦争をやるかどうか決めている場所だから、それだけのものなのだと云ったらそれは大間違いで、

現場で食糧やら寺子屋の先生やらを供給している国連というのはまさにNGOなのです。これはこの何年かの極めて大きな変化ですね。

このNGOの世界が、ぐっと広がってきました。国連もよくよく見たら、全体としての国連はNGOではないけれども、国連のある部分は完璧にNGOだということが見えてきたわけです。これをどうやってつなげていくか。お互いの力をどう合わせるかということがとても大きな問題になっています。たとえば緒方貞子さんが代表を務めていらっしゃる国連難民高等弁務官事務所などは難民を救う仕事をしていますけれども、多くのNGOと仕事を分担しながら、あるいは力を合わせながらやっています。国連難民高等弁務官事務所の報告書でも、「今やNGOなしでは、私たちの仕事はやっていけない」とはっきり書いています。そういう意味で、国連の機関とNGOというものがお互いに補うような形が生まれてきている。

そのことを実に明確に認識し始めたのがアナン事務総長です。昨年アナン事務総長は3月と7月に国連改革の大きな報告書を2回出しました。ポストを削るとか予算を削るとかそういうことばかりがマスコミでは報道されましたけれども、その報告書には実はもっと大事なことが書いてあります。こうやって国連の本来の組織が縮小していく中で、これから事務局としてはある一つの方向性を求めたい。それは何かというとNGOとの提携関係の強化なのです。

アナン事務総長は、NGOという手垢のついた言葉をあまり気楽には使ってはいません。そのかわりに、やや聞き慣れない言葉かもしれませんが、「市民社会組織」という言葉を使っています。市民社会、つまり主権国家の作る社会ではなく一般の市民が国境を越えて作る社会、というものを彼は考えているわけです。そういうものが今、世界で育ちつつある。そういうものが育ちつつあって、国境を越えた人間のつながりというものを作っている。それと国連がどう手を携えていくか。それがこれからの国連の課題だと言うのです。これは見落としてはいけない点だろうと思います。

こういう国連の様子を見て何を考えるべきかということなのですが、国連がいろいろな形で不十分だという不満を持っている方も多いでしょう。私なども専門家として見ていて不満に思ったり、もっとよくしたいなと思うところはあります。しかし一つだけ最後に考えておきたいことがあります。国連はあれもできない、これもできない。ならば、ここで国連にいろんな権限を一挙に集中してしまったほうがいいのかという、性急な意見がかならず出てくるということです。

国連に核兵器まで持たせろという意見さえ出たことがあります。そうすれば世界最強の

政府ができあがって世界政府を持てるし、世界の富の配分もうまくいくだらう。こういうことを考える人がかならず出てくるのです。しかし、おそらくは、今そういう集権化をやろうとしても、うまくいかないでしょう。基本的にはカントの考え方をじっくり噛みしめたほうが良いと思うのです。むしろ今の世界の傾向は分権化というところにあります。いろんな人間集団の自己決定を尊重するということが大前提になっている。

その傾向を国連も避けては通れず、多様性というものを積極的に尊重するほかない。しかし多様性の尊重だと言って、それぞれが勝手気ままなことを主張してぶつかり合っていて良いのか。そうではなくて、多様性を積極的に承認した上で、なおかつお互いどこでどう譲り合うかということに関して道筋をつける。国家間の紛争の問題であれ、個人の紛争の問題であれ、戦争に至る前に程々に収める術というものをどう作っていくかということで、なすべきことがまだたくさん残されているのだらうと思います。

大事なことは、紛争というものが人間社会では絶えないけれども、他者の存在までも否定するということは否定しなければならない、という点です。そこまでは許されないのだということを国際制度の上でも、あるいは国家間の関係の上でも、人間関係の上でも、教えていかなければなりません。

哲学的な話だけで終えてはいけないと思うのですが、最後はそんな具合になってしまうことをお許しいただかなければなりません。国連とはどういう役割を持った機構なのかというと、哲学的、抽象的に言うならば、やはり国々と人々を、寛容を接着剤にして結びつなく存在なののだらうと思います。国連憲章の前文に、寛容を実行し、かつ善良な隣人として互いに平和に生活し……、ということがうたわれています。

国連というものは世界平和を保つためだ、侵略国が現われたらそれを処罰するためのものだということがよく言われてきました。それも大事な点かもしれませんが、多様性が進んだこの世界でとりわけ重要なのは、寛容ということです。寛容ということを個々の人間関係から国家の関係、あるいは国際機構という場での関係に至るまでどう制度化していくのか。それはいつまで経っても完璧になるはずがないということはよくわかっている、100パーセント不完全なままで終わらせないようにする。そういう役割を負ったのが国連である。もっと正確に言いますと、国連はそうでなければならないのだというのが、非常に大きな命題になりますが、きょう私が最後に強調しておきたいことです。

そういう意味では、国連というのは、おそらくこれからはばらくの間は未完の試みだらうと思います。やってもやってもなかなかうまくいかない。それでも、みんなでやり続ける。それは寛容の結び目として存在し続けることですし、戦争のない未来、飢えや差別の

ない未来を求めることでもある。その具体的な結集の場としてこういう機構というものほどそんなに不完全であっても存在しなければならぬ。不完全であるならば、それをもう少しまともなものにするための努力をしていかなければならぬ。それが、今世紀が変わろうとしている今この時点で、国連を理解する究極のやり方であると思いますし、教えるときの究極の方法でもあるのではないかと考えています。

ちょっと時間が長くなってしまいました。どうも長い時間ご静聴いただきまして、ありがとうございました。(拍手)

(総合司会)たいへんありがとうございました。国連をどう理解し、どう教えるかということについてお話いただきました。日ごろ私たちがともすれば見誤りがちな、見落とされる部分をわかりやすく教えていただいたと思います。本当にありがとうございました。ご質問もあろうかと思いますが、時間の関係で後のパネル討論会の中で先生の講義に対するご質問をいただければと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

パネル討論会

(総合司会) パネル討論会に入りたいと思います。パネリストは先ほど講演いただきました最上敏樹先生、それからご挨拶いただきました国連広報センターの妹尾靖子所長代理。それから川島高等学校の徳元雅美先生に、国連に関する高校生の意識調査の発表もしていただくこととなります。司会は、国連広報センターの千葉潔さんです。

それではよろしくお願いいたします。

(司会) 国連広報センターの千葉でございます。司会を務めさせていただきます。既に最上先生から素晴らしいご講演をいただき、また現場の先生から国連の活動についての学習指導計画についてご提示をいただきました。国連をどういうふうに教えていったらいいのかということについて、十分なほどのヒントをもう既に与えていただいたわけですが、このパネルディスカッションの中では、さらにここにお集まりの先生方のご意見やら、ご質問等お受けしながら、お話しを深めていきたいと存じます。

まず徳島県高校生の国連に対する意識調査を実施していただきました徳元先生からのご発表、そして最上先生からそれに対するコメントをお願いします。そして、国連広報センターの妹尾所長代理のほうからセンターの活動等についてお話しをさせていただきます。その後、会場の皆さま方からご質問、ご意見等を受けながら、討論を進めていきたいと思っております。

それではまず最初に、徳元先生のほうから、高校生の意識調査のご発表をお願いします。

(徳元) 先ほど穴喰商業の宮本先生から現代社会の研究内容について発表させていただきました。その研究を進めるにあたって、実際高校1年生で入学まもない子どもたちなのですが、その子どもたちがどの程度国際連合やそれぞれの活動について認識しているのか知りたいと思い、このアンケートを実施させていただきました。(以下、アンケート調査の結果報告より。)

国際的諸問題と国際連合の活動に関するアンケート調査結果の報告

1998.8

〔調査の目的〕現代社会における「国際連合の活動」を学習するにあたって、事前に生徒の知識や考え方の実態や問題点を把握し、学習指導の下地を確保する。

〔調査方法〕

* 方法 有意抽出（標本） 無記名⇒⇒アンケート調査

* 対象 徳島県高等学校、第一学年生387名（普通科7学級・専門学科等4学級）

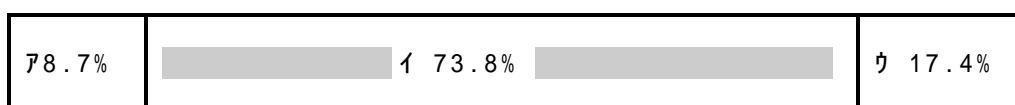
* 期間 1998年7月3日～16日 回収 7月24日

次の質問にご回答ください。 選択肢から一つ選んでください

国際連合について

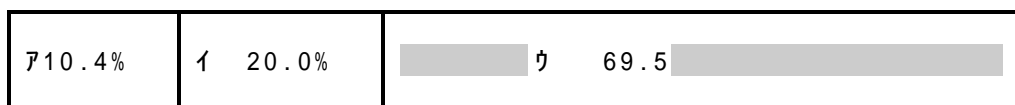
1 国際連合の成立はいつだと思いますか。次の年代から選んでください。

ア 1930年 イ 1945年 ウ 1960年



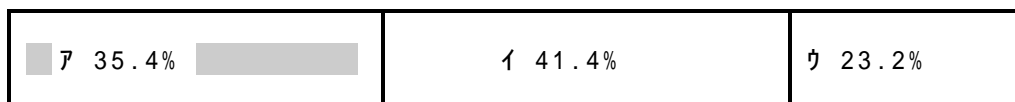
2 国際連合の本部は、どこにありますか。次の都市から選んでください。

ア ロンドン イ ジュネーブ ウ ニュヨーク



3 国際連合の加盟国数は、1998年現在、いくつだと思いますか。次の数から選んでください。

ア 185カ国 イ 151カ国 ウ 195カ国



4 国際連合の機関で知っているものを3つあげてください。（このアンケートにあげられているものは

除いてください）

WHO	58	安全保障理事会	8	PKO	10	IBRD	2
IMF	17	ILO	7	OPEC	11	ASEAN	2
UNESCO	27	WWF	1	ユニセフ	16	NIES	1
(ユネスコ)		GATT	4	NGO	5	総会	5
WTO	18	WLO	1	NATO	6	ODA	6
EU	3	UNCTAD	1	エイベック	1	NATO	1
経済社会理事会	2	国際司法裁判所	1	常任理事国	1	FBI	1
本部	1					その他	7

信託統治について

1 あなたは信託統治について知っていますか。

ア 知っている イ 少し知っている（聞いたことがある） ウ 知らない

ア 43.1%	イ 48.6%	ウ 8.4%
---------	---------	--------

2 日本が植民地をもっていたことを知っていますか。

ア 知っている イ 少し知っている（聞いたことがある） ウ 知らない

ア 37.4%	イ 39.5%	ウ 23.1%
---------	---------	---------

「知っている」と答えた人は、知っている国名・地域名を書いてください。

満州（国）	2	5	中華人民共和国	4	中国	2	3	東南アジア	1
朝鮮	5	3	韓国	2	3	朝鮮民主主義人民共和国	2	ロシアの南側	1
台湾	1	2	リョウトウ半島	5	清	1	カラフト（半分含）	2	
フィリピン	4	マレ - シア	2	アメリカ	2	北方領土	1		
スリランカ	1	パキスタン	1	スリランカ	1	インド	1	沖縄	4
ホンコン	1							その他	5

3 日本が植民地以外に支配していた地域があったことを知っていますか。

ア 知っている イ 少し知っている（聞いたことがある） ウ 知らない

ア 14.8%	イ 34.6%	ウ 50.7%
---------	---------	---------

「知っている」と答えた人は、知っている国名・地域名を書いてください。

満州	1	3	ロシアのカラフト	1	朝鮮（半島）	3	韓国	3
アジア	1	ホンコン	1	中国	7	シベリア	1	
沖縄	2	琉球王国	1	カラフト	1	台湾	1	
東南アジア	2	インドネシア	1				その他	2

経済援助について

1 あなたは、先進国は発展途上国に対して援助をした方がよいと思いますか。

ア した方がよい イ しない方がよい ウ どちらともいえない

ア 65.4%	イ 16.8%	ウ 27.8%
---------	---------	---------

2 援助をするとしたら、何をすべきだと思いますか。（全ての方がご回答ください）
 ア お金 イ 生活必需品 ウ 機械 エ 技術を教える人 オ その他

ア 18.6%	イ 35.8%	ウ	エ 33.6%	オ
---------	---------	---	---------	---

6.9%

5.1%

複数回答が少数の者にありました。

3 南北問題を解決するため、先進国と発展途上国との対話の場として設けられたのは、何という機関ですか。

ア UNICEF イ UNCTAD ウ GATT エ PKO

ア 19.8%	イ 35.9%	ウ 19.5%	エ 24.6%
---------	---------	---------	---------

無記入が少数の者にありました。

4 あなたは募金した（海外向け）お金が、何に遣われているか知っていますか。

ア 知っている イ 知らない

ア 54.5%	イ 45.3%
---------	---------

国際的な人権保障について

1 「子どもの権利条約」について知っていますか。

ア 知っている イ 少し知っている ウ 知らない

ア 27.7%	イ 44.8%	ウ 27.5%
---------	---------	---------

2 アムネスティ・インターナショナルについて知っていますか。

ア 知っている イ 少し知っている ウ 知らない

ア	イ 15.1%	ウ 77.0%
---	---------	---------

7.8%

3 「女子差別撤廃条約」について知っていますか。

ア 知っている イ 少し知っている ウ 知らない

ア 31.3%	イ 43.9%	ウ 24.8%
---------	---------	---------

国連の安全保障理事会について

1 安全保障理事会の名称について知っていますか。

ア 知っている イ 少し知っている ウ 知らない

ア 29.1%	イ 29.8%	ウ 41.1%
---------	---------	---------

「知っている」「少し知っている」の回答者のみ教えてください。

* A、安全保障理事会、常任理事国の拒否権について知っていますか。

ア 知っている イ 少し知っている ウ 知らない

ア 44.8%	イ 30.9%	ウ 24.3%
---------	---------	---------

* B、近年、日本の政府が安全保障理事会の常任理事国入りを希望していることを知っていますか。

ア 知っている イ 知らない

ア 50.2%	イ 49.8%
---------	---------

2 集団的安全保障体制のことを知っていますか。

ア 知っている イ 少し知っている ウ 知らない

ア	イ 15.0%	ウ 79.7%
---	---------	---------

5.3%

3 「PKOの活動」について知っていますか。

ア 知っている イ 少し知っている ウ 知らない

ア 17.1%	イ 34.9%	ウ 48.0%
---------	---------	---------

地球環境問題と国連の活動について

1 近年、地球の平均気温が高くなっていることを知っていますか。

ア 知っている イ 知らない

ア 93.2%	イ 6.8%
---------	--------

2 地球温暖化の原因について知っていますか。

ア 知っている イ 少し知っている ウ 知らない

ア 74.3%	イ 20.9%	ウ
---------	---------	---

4.7%

3 昨年日本で開催された温暖化防止京都会議について知っていますか。

ア 知っている イ 少し知っている ウ 知らない

ア 42.1%	イ 27.5%	ウ 30.5%
---------	---------	---------

4 国連人間環境会議（1972年 - ストックホルム）のことを知っていますか。

ア 知っている イ 少し知っている ウ 知らない

ア 12.9%	イ 28.9%	ウ 58.2%
---------	---------	---------

国際連合にどのようなイメージをもっていますか。

ア プラス（よい）イメージ イ マイナス（悪い）イメージ

ウ よいとも悪いともいえない エ わからない

ア 22.5%	イ	ウ 40.6%	エ 31.0%
---------	---	---------	---------

5.9%

《アンケート調査についての補足・感想など》

- 1、アンケート対象生387名は、県下第一学年生約9900名の約3.9%にあたる。
- 2、1998年度高校入学検査の社会科の平均点は54.9点(100点満点)である。
- 3、アンケート調査・結果は、アンケート項目の不備や資料不足、誤差もあり、必ずしも生徒の実態を完全な形で提示したものとはいえないが、おおよその実態として参考にすることはできると思われる。考察については割愛させていただいた。
- 4、国際的諸問題や国際連合の諸機関・諸活動などについての学習は、学校での授業のほかテレビや新聞などのマスメディアによることもある。
- 5、一般的に言って、マスメディアの放つ国際的な出来事の情報には断片的なものが多く理解も難しく、高校生には興味・関心が低い分野であると考えられる。
- 6、国際連合の成立や理念・組織やかつての日本の植民地に関することは、日本や世界の近現代史との関連が深いところである。

《参考》『公民・中学社会』（教育出版）の教科書“国際社会と平和主義”のところで「国際連合」に関連したことがらには次のような語句が掲載されています。主な語句をあげてみます。

国際連盟 1920年成立 国際連合 1945年6月発足 51カ国加盟 国際連合憲章 本部はニューヨーク 現在の加盟国185カ国 安全保障理事会 5常任理事国と10非常任理事国 5大一致の原則 拒否権 経済社会理事会 国際労働機関（ILO） 世界保健機構（WHO） ユネスコ 国際司法裁判所 総会 平和維持活動（PKO） 世界人権宣言（1948年） 人種差別撤廃条約 国連人権規約 女子差別撤廃条約 拷問禁止条約 子どもの権利条約（1989年） 民間公益団体（NGO） 赤十字社 ユネスコ協会 政府開発援助（ODA） 経済協力開発機構（OECD） 開発援助委員会（DAC） 国際社会 国際法 東西対立 冷たい戦争 アジア・アフリカ会議 第三世界 南北問題 資源ナショナリズム 青年海外協力隊 集団安全保障 部分的核実験停止条約 INF全廃条約 核兵器拡散防止条約 国連人間環境会議 温暖化他

徳島県高等学校教育研究会 社会科学会 現代社会研究部会

(司会)このアンケート調査について、最上先生のほうから何かコメント、ご意見を願いますでしょうか。

(最上)我々はこれをどう読むべきなのかよくわからないというのが率直な感想です。1年生だということですから、中学までの知識がある生徒たちということなのでしょうけれども、どうもばらつきがひどすぎるなという気がするのです。

たとえば、なぜこんなことをこんなに知っているのだろうという驚きがあるのは、信託統治についてですね。信託統治について少し知っているというのを含めて、9割を越えるというのはいったい何を知っているのだろう。「なんとか信託銀行の利率年何パーセント」なんていう答えが出てきたりするのではないかと思って心配なのですが。

と言いますのは、たとえば安全保障理事会を知らないと断言してくれている生徒が41パーセントもいるわけですね。これを知らない生徒が41パーセントもいて、信託統治というものを、言葉だけでも知っている生徒が9割にもなるというのは、いささかばらつきがひどすぎる。それぞれの回答の間に意味のあるつながりが本当にあるのだろうかという危惧が、ちょっと私にはあります。

知っている、知らないという知識のことで言いますならば、私が大学で相手にしています学生は、高校を卒業した段階でも世界的に活躍しているNGOのことなどは割合よく知っているのですね。対照的にこのアンケートでは、アムネスティ・インターナショナルなど知らないという生徒さんが77パーセントもいますが、信託統治知識率に比べれば驚くほど低い数値かなという気がしました。

最後に、これがきわめ付けかなと思うのですが、いちばん最後の問題です。国際連合にどのようなイメージを持っていますかということで、良いとも言えない、悪いとも言えない、わからないというのを合わせて約70パーセント。率直に言いますと、国連というものをほとんど知らないということなのでしょう。知らないからこそ良いとも言えない、悪いとも言えない、わからない。その割には細目化された個々の質問についての「知っている」という答えが割合多くて、これは知らないのになんとなく知っていると言っただけなのか。それとも知っている本人は錯覚をしているけれども、ぜんぜん別のことを考えているのだろうか。この辺のことをもう少し具体的に教えていただければありがたいと思います。

質問項目にはないのですが聞いてみたいのは、国連のような機構がこれからの世界にとって、今の人々にとって必要かどうかということですね。私も大学の学生たちに聞きませうけれども、高校の生徒さんたちはどう考えているのか。それについてもわからないとい

うことであるならば、それを理解し考えてもらうためにどういう教育をしていったらよいか、考えなければならない。その意味では、国連が必要だと思いませんか、思いませんかという問いが重要なのではないかという気がいたします。また後で補足します。

(司会)本当にこの最後の質問の、国際連合にどのようなイメージを持っていますかというところで、プラスともマイナスとも言えない、わからないという答えで70パーセントも占めてしまうというのは、国連広報センターとしてもとてもショックです。これはいったいどういうことなのか。広報センターの働きが悪いのか、とかですね。常任理事国入り、PKOなどの言葉はよく報道されて子どもたちはよく知っているのですが、何が足りないのか、いけないのか。どうしたらよいのか。後ほど先生方のほうからご意見等いただければと思います。

次に国連広報センターの所長代理妹尾のほうから、お話をさせていただきたいと思います。

(妹尾)まず私どもの国連広報センターの説明をさせていただきます。東京にあります国連広報センターはニューヨークの国連本部の日本の出先というか、代表をしております。例えば事務総長が訪日したときに外務省と連携しながら各重要機関とのアポイントメントを取ったり、大臣に会うアポイントメントを取ったり、事務総長のメッセージが日本の国民の皆さんに行き届くように準備をしたりというようなことをしているわけです。

国連広報センターは事務局のどの部分にくっついているかと言うと、広報局です。PKO局とか、人道問題局(これは数か月前まで明石康さんが長でいらっしゃった局です)と並ぶ部局のひとつですが、その広報局の下に広報センターが世界にありまして、そのうちのひとつということになります。

国連について、皆様に正しく理解していただくために、日々、広報活動をしております。そのターゲットとなりますのはプレスの方々。また学校の先生とか、生徒の皆さんとか、研究者の方々。そして現在では、先ほど最上先生のほうからございましたけれども、日本でもNGOの活動が非常に活発になりまして、NGOの皆さまとの連携も当然強化しております。

広報活動として、どういうことをしているかと言うと、たとえば皆さまのお手元にお配りしたような広報資料を作成します。英語の資料を日本の皆さま用に日本語に翻訳して出版しております。英語でいくら資料を配布してもなかなか読んでいただけないので、日本

語にする作業というのは非常に大切だと思っております。

センター所長は日本人でなく外国人がなります。現在、所長のポストは空席になっておりますが、所長が自治体等にまいりましたときには、県知事、市長にお会いして、国連広報センターの機能等をご説明させていただくということもしております。また日々国連広報センターには電話、ファクス、最近ではEメールでいろいろなお問い合わせがございます。たとえば「国連加盟国は何ヵ国ですか」とか、「今年の国際年のテーマは何ですか」などというお問い合わせも非常に多いですね。それに対応するためにこの9月初旬から国連広報センター独自の日本語のホームページを開設しております。やはり日本の国民の皆さまには日本語でのサービスというのが非常に大切なので、このホームページには私ども力を注いでいきたいなと思っております。

また国連広報センターには資料・閲覧室がございまして、国連から出るドキュメント、決議等、バックグラウンドとなるいろいろな情報を置いております。そういう文字で書いたもの以外にビデオも作っております。スライド、写真、ポスター等もございます。ご希望があればパネルにするための写真も用意してあります。

国連広報センターにおいて、この教育シンポジウムが占める位置というのは非常に高いところにあります。今後も、毎年2、3箇所の地域に私どもが出かけて行って、開催していきたいというふうに考えております。

東京で日ごろ活動しておりますので、いろいろな現場の先生の声というのなかなか聞こえにくい。やはり出かけて行って、こういうふうにコンタクトをしない限り、皆さまの希望されるような広報活動はできないと思っておりますので、フィードバックというかコメント等もいただければと思っております。よろしくお願いいたします。

(司会)国際連合広報センターというのはとても大きな組織なのだろうというイメージを持たれているのか、センターを皆さまが訪れたときに、その狭いスペースにほとんどの方々は「えー」とびっくりされます。そこら辺についても、妹尾さんのほうから、いかがでしょうか。

(妹尾)先ほど国連広報センターの紹介のときに、国連大学の中にあるということでご紹介されたのですが、私どもは決して国連大学の一部ではなくて、国連大学ビルのテナントとして入っております。その辺はお間違えのないようにお願いします。まず所長を含めて国連広報センターには8つのポストがあります。大きく分けて広報担当が4人で、総務、

所長秘書、ドライバーと所長を入れて8名。非常に小さなチームでやっております。本日、司会を務めております千葉も、ここに来る直前まで国連広報センターの日本語ホームページの立ち上げのため、トップ・ページのデザインやら何やらで苦労してやっておりました。

(司会)フロアーからのご質問をお受けする前に、冒頭に徳元先生から生徒の意識調査ということで発表をいただきましたが、それに関連して先生方が実際に国連を教えられる際に何時間ぐらい確保されていらっしゃるのか。そして国連を教えるうえで、何を困難と感じられているかといった点について、ちょっと補足していただけないでしょうか。

(徳元)国連を実際高等学校で教えるときの問題点などは、フロアーにおられる先生方のほうがよくご存じだと思うのですが。個人的に考えるのは、やはり教科書の掲載部分というのかなり後のほうにありまして、3年生で政治経済の授業をするときには、2学期の終わりになりますと受験体制にのまれてしまうなどして時間的に余裕がない。教科書でもそこまで進めていないので、流すようにしか国連を教えるということができないというのが現状ではないかと思えます。

現代社会の発表のときに宮本先生もおっしゃっていましたように、環境問題であるとか、PKOの問題について、生徒はかなり知っております。ただ国連がどういう機関を持っているのか、国連がどんなことをしているのか。国連を主流に置いた授業というのはあまりされていないのではないかと思います。

(司会)ありがとうございます。それでは、ここで率直なご意見、ご感想、ご質問を、フロアーからお受けしたいと思えます。できるだけ多くの方々からご意見、ご質問をいただきたいと思えますので、ご発言は端的に。またご発言の前にご所属と、お名前をお願いいたします。

川島高校の遠藤と言います。現代社会の研究員をしておった者でございます。最近現代社会、政経を授業で持っていないのですが、過去を振り返って、国連にたくさん授業を割いたという記憶はございません。ただ国連を教える際に、国連の成立あるいは組織、機能など、先ほど最上先生から図で示していただいた、ああいう機構論だけで終わってしまった感がございます。これでは生徒はなかなか飛び付いてこないように思えます。

機構論も必要かと思うのですが、紛争とか貧困、あるいは人権問題とか環境問題という

諸問題、それに国連がどう対応し、解決のための枠組み作りをしているか。あるいはNGOの動き、あるいは国家の圧力、そういったものをセットにして教えていけば自然な形で国連が入ってくる、と考えます。

NGOについては、どうも日本のNGOの動きというものは弱いという話も聞いております。先日広島のスィンポジウムに出向きました。その中で朝日新聞の方が、日本のNGOの弱さ、さらに政府が軽視しているという指摘をされておりました。それではいけないわけで、日本もNGOの動きを育てていかななくてはならないのだと感じます。

今回のわれわれの研究において、学習指導案、5つのモデルを作ったわけですが、他にもそれぞれのテーマでいろいろ作れるなと思います。写真とか、ビラを使うとか、雑誌とか、討論させる、あるいはレポートを提出させるとかいろんな形の学習案が作れるなと、この研究委員会で感じたところであります。

それから、さらに1時間授業を取るのではなしに、たとえばインド・パキスタンで核実験があった、そんなときは社会の先生は社会の授業に出て行って黙っているのではなくて、やっぱりその問題を少しでも、5分でも取り上げて、国連の安保理はこういう対応をしているのだということを授業の前にちょっと取り出せば、それも国連を教えることになるのではないかなと思います。

一昨日アメリカがアフガニスタンとリビアのテロの施設と目される施設を攻撃した。明るく日の新聞は、すごく紙面を割いておりました。テレビでもすごく流しておりました。そういうようなのも、非常にタイムリーに取り扱えるのではないかというような感じを持っております。

先ほどのアンケートでございますが、11学級の生徒のアンケート、387でございますが、学校については7校にわたっておりますので付け加えておきます。以上です。

(司会)ありがとうございます。現場の先生から、現状と、国連を教えることについての提案も含めた貴重なご意見をいただきました。今の会場からのご意見に関連して、最上先生のご意見を拝聴できますでしょうか。

(最上)今の日本の教育制度からしますと、中学・高校で国連のことを教える授業というのは極めて限られている。その中でもっと国連のことを生徒たちに知って欲しいと、我々が外野からいくら勝手なことを言っても限度があるのだろうというのがよくわかります。そうしてご苦労なさっているということを十分承知の上で、それをいつか乗り越えていた

だくということを期待しながら、私が大学生を相手にそれなりに苦労した中で見えてきたことを、どこまでご参考になるかわかりませんが、いくつか申し上げます。

1つの側面は技術的なことです。やっぱり視覚に訴えるということが相当重要だと思われれます。それから現場主義です。たとえば視察に連れて行く。先ほど、テニアンの経験が発表されました。テニアンの場合は国連のことというよりは、むしろ平和教育的な色彩のほうが強いわけですが、もっとお金の余裕があれば国連そのものを見せたりする。視覚的教材が若い学生に与えるインパクトというのは非常に強いですね。見ただけでこれは何となくおもしろいものだと思ってしまうというところがある。もちろん、それにはちゃんとした説明をつけてやる必要があるのですけれど。今若い子どもたちはテレビ世代、視覚世代なのか、そういうものから受けるインパクトのほうが、聴覚的に受けるインパクトよりもはるかに強いようです。

しかし国連へ連れて行くといってもお金もかかりますので、もうちょっとお金のかからない方法がないか。大学生らでやっております方法は、いわゆる模擬国連というものです。学生たちが集まって各国の代表になって国連総会のようなことをやる。ある問題について、それぞれの国の利害を代表してどちらが議論で相手を説得できるかということをやっているうちに、ああこういう問題があるのか、とわかってくるのですね。これが技術的な側面として言えることだろうと思います。

もう一つの側面は教える側の姿勢の問題です。私は大学生を教えていますので、あんまり子どもを相手にするようなやり方はしないように、むしろ禁欲しているつもりなのですが、ある年に国際機構論の最初の授業で、自分がなぜこんな学問をやっているのかという個人的な体験を話すことから始めたことがあったのですね。先ほど、ちらっとスライドで見させていただきました第二代事務総長のハマーショルドという人がおりますが、この人に、私がまだ高校のころでしたけれども、ちょっとしたきっかけで非常に惹かれたのです。その人への関心を猛烈にかき立てられて、何となくその人のことを調べているうちに、大学院でも国連のことを専攻して勉強するようになってしまい、拳げ句の果てはそれで身を立てるようになってしまった。

自分がハマーショルドに引っ張られてここまで来てしまったのだという話を、まず第1回目にしましたら、それで学生の目の色が変わってしまいました。後で聞いてみましたら、この先生は本気でこの分野を勉強しているらしい。どうも単なる飯の種で国連のことをやっているのではなくて、こんなに個人的な経験があって、入れ込んで勉強しているらしいということが学生に伝わった。それで学生のほうもこの先生はこんなにおもしろがって

勉強しているなら講義も真面目に聞こうかということになった、というのです。そういうことがちょっとしたきっかけになるだろうと思います。

もうちょっと一般化してみますと、やっぱり教える側が本当におもしろいと思っていなければいけないし、おもしろいぞということを伝えることが必要だろうと思います。たとえばこれは大学生でも高校生でも同じだと思うのですが、今、国際問題の中で何にいちばん関心があるかということをお聞きになったらいいと思うのです。ある学生は平和、戦争の問題と言うかもしれません。ある学生は開発の問題と言うかもしれない。ある学生は人権の問題と言うかもしれないし、ある学生は教育の問題と言うかもしれない。

それに対して国連の問題を勉強するときに非常に便利なのが、どの答えを返してもらっても「あ、それ国連でやっているよ」と言えることなのですね。「じゃ、どこまでやっているか見てみようじゃないか」「安保理はこれとこれだけやって、ここのところはちょっとダメだな」「人権の問題はどうだろう。人権委員会というのがあって、これだけのことをやっている。かなりよくやっているね」「こっちはちょっとダメだね」という話ができる。

「環境問題はここでやっている」「開発の問題はここでやっている」。つまり国連というのは世界のブラックホールみたいなところがありまして、ありとあらゆる世界中の問題を引き受けてしまっているというか、ありとあらゆる世界中の問題が流れこんでしまっているところがあるわけです。これだけいろんなものを扱っているのなら、それを見なければ、国際社会の問題を眺めたことにならない、と言えるのです。実際にそういうことをやるべきだと思うのです。国連がどういう問題についてどれだけの解決をはかることができているか、どれだけの解決をはかることができないでいるか。そういうことで国際社会の努力の成功度、失敗度というのはかなりよくわかるようになる。これから世界に生きる人間として国連がどれだけうまくやって、どれだけへまをやっているかということはちゃんと見ておかなければいけないでしょう。

その意味で、学生や生徒といっしょになって「おもしろいぞ、おもしろいぞ」と、知的に今の世界にコミットするということを楽しめる。そういうことがあるだろうと思います。もちろんそれをやっていくときには、教える側に相当の勉強量が要求されます。私がよくやりますのは、学生に国連の良い点というのを全部出させる。悪い点というのを全部出させる。国連びいきの学生やら、国連に反感を持っている学生やらいっぱいいるわけです。全部出させます。全部出させて「うん、そうだ。そうだ」と聞いて、それに対して全部に反論します。つまり良いと思われている点についても、まずい点も裏側にはある。悪いと思われている点の裏側にいい点もある。そういうことを全部言って、それで学生に「これ

は、もうちょっと勉強しなければいけない」という気持ちにさせて授業を始めるということをよくやります。

つまり教える側に、国連の表も裏もと言ってはちょっと言い過ぎかもしれませんが、それについて縦横の知識があって初めてできる方法です。その意味では国連のことを教えるためには相当勉強しておかなければならない。ちょっと辛い面はあるのですが。これを作りだすと学生の知的な関心というのはかなり高まってきますし、浮ついたものではなくて、地に足の着いた関心になってきます。おもしろいなと思っても裏がある。ダメだなと思っても裏がある。そうして世界の複雑さというものを、具体的な問題を通して学生や生徒がわかるようになります。国連というのはそのための恰好の素材なのであり、そのことを伝えるためにこちらも一生懸命勉強するのだ、という面が多分にあるような気がします。

(司会) ありがとうございます。フロアーから何か他にご質問、ご意見ございますか。

少し教えていただきたいと思うのですが。インドネシアのスハルト政権が崩壊する前後に非常に庶民は経済的に危機に陥っている。そのときIMFもしくは世界銀行から援助が来たけれども、それは決してインドネシアの庶民の味方になるようなお金ではなかった。それは続いてやってくるグローバリズムの走りであって、そちらのほうの利益に資するようなお金の使い方がされている。先ほど最上先生がおっしゃった世界政府的な強い権限とはまさしくIMFや世界銀行、構造調整の命令ではないか。ある雑誌でそんなことを論じていたのですが、こういうふうなとらえ方が、正しいかどうか、現実的かどうか教えていただきたいと思います。

(最上) 基本的に正しいと思います。IMFや世銀などがお金を出す。国連の機関だけでなく、日本がインドネシアに出していたお金などもそういった使い方をされています。つまりある問題については国連の機関やある特定の国の政府が加わり、後で考えてみたらどうもけしからんということが、実際にはいくつか起きてはいるのですね。国家であれIMFのような国連の機関であれ、これはやめるべきだと思うのです。

IMF・世銀に関して言いますと、実はこの両機関はしばしば強い批判の対象になります。といいますのは、IMF・世銀というのは国連の機関の一部だということになっていますけれども、ほとんどニューヨークからのコントロールが及ばないところなのです。独立城みたいなものです。ワシントンにあって、ニューヨークからはほんのちょっとの距離

なのですが、ほんのちょっとの距離以上の独立度があります。ニューヨークにも活動報告はほとんどありません。ニューヨークのほうで開発についてはこういう政策を打ち出したいのだと思っても、それを聞いてももらえないとさえ言われます。あれを何とかしなければダメだというのが、心ある国連研究者の国連改革論において言われていることです。

しかし、国連改革の議論においてIMF・世銀を何とかしなければダメだという意見は、少なくとも日本ではほとんど聞かれませんが、国連の中でも問題はいくつもあります。問題はまず何から改革すべきかという優先順位です。それは安保理の常任理事国の数を増やすかどうかではないような気がします。それよりも、まずIMF・世銀を何とかするべきだと思うのです。ニューヨークでいくら立派な開発政策を立てても、あの2つの機関がそれに反する施策をとってしまうことがしばしばあるのです。しかしIMF・世銀のように膨大なお金を持ってしまった機関というのはなかなか変革しにくい。財力と権力とを持っている機関というのは自分で自分を改革するなどということは絶対にないのです。この2つを改革するのは相当たいへんだと思います。

城ノ内高校の大久保と申します。広報センターにお伺いします。センターでお作りになられた「国連のここが知りたい」という小冊子なのですが、読ませていただきましたら、国際連合という呼び方は、ユナイテッド・ネーションズ、連合国という名称から起こっているのだということが書いてあります。また、たとえば信託統治理事会の説明の中に、信託統治地域は第二次大戦後、敵国から切り離された領土という文言が出てきます。

もちろん国連の成り立ちからして当然なのかもしれませんが、しかし、国連ができて50年以上経った今でも、やっぱり連合国の視点の側からの国連紹介がなされているような気がするのです。日本は相変わらず敗戦国で、連合国に敗れた国である。また別なページでは非常に日本の拠出金が多いことが紹介されている。拠出金が多いから高い地位を与えろということではないのですが、日本もそれなりの貢献を果たしているが、やっぱりいまだに連合国の側からの視点で紹介がされているように思います。私の考えがおかしいかどうか。ご意見を伺いたいと思います。

(司会)これはもともと英文で国連の広報局が作ったものを翻訳したものです。これについてのコメントを広報センターからというのはちょっと難しいところがありまして…。これについて最上先生からアドバイスを頂けたらと思います。よろしいでしょうか。

(最上)日本語版というのをしっかりと見たことがここ何年なかったのですが、たいへんいいご指摘をいただいたと思います。今、千葉さんもおっしゃったように、これは英文からの訳語です。国連憲章にも実は「旧敵国」という言葉がそのまま残っているわけです。旧敵国条項というのがあって、この国に対しては第二次大戦で勝った側の国に対してはいつでも攻撃をしかけてもかまわないという規定まで残っている。

こういう規定はやはり不適當だということで、国連憲章の改正の話まで進んでいる中で、国連を紹介する公式の冊子の中ではその言葉が残っているというのはやっぱり不適切です。

(司会)ご指摘、ありがとうございました。今後当センターの出版物作成において、さらに細心の注意を払っていきたいと存じます。

私は教育者でもなく、民間のNGOの活動をしている者です。今回、国連広報センターが徳島に来るということを、東京から知らせていただきましたので、参加させていただきました。

ジンバブエやザンビアを中心に活動しております。その子どもたち、病院、あるいはそういうところの人たちをフレンドリーな形で支援していますが、逆に、精神的には私たちは助けてもらっているのだと思っています。そういう意味で同等に付き合っている。

そういう現場で、NGO活動をしている人たちがいるということ、教育現場ではどの程度把握されているのでしょうか。また先ほど最上先生がおっしゃっていましたが、遠いところには連れていけないけれども、ローカルでも民間の人たちの活動の体験などを教育の現場の中で生かすことはできないのでしょうか。

高校生たちが受験のことは知っているがそれ以外のことをあまりに知らないことに、ちょっと悲しいものを感じたりしております。教育者でない者が場違いのところでは発言して失礼かなと思いましたが、発言させていただきました。それについてお答えしていただけたらうれしいと思います。よろしく願いいたします。

(司会)ありがとうございます。今のご発言に関連して、フロアーにいらっしゃる先生方から、実際には現場ではこんなふうな形で教えているというものがおありになったらお願いいたします。

教育委員会の湯浅でございます。新しい形での取り組みはいろいろなされていると

思います。たとえばボランティアとか環境問題ですね。高等学校においては教科とかあるいは特別活動で、ボランティア活動はどんどん活性化してきている。そういった中で先ほどテニアンの話があったと思います。その他の高等学校でも諸外国と交流を重ねている。たとえば那賀高校とか、鳴門第一とか、日和佐とかたくさんある。脇町高校なんかはNGO関係で具体的に生徒がいろんな取り組みをして、それを本人たちだけではなくて学校全体のものにしております。またこの前ボランティアの学習講座を県教委主催でやったのですが、そのときにその体験を各学校から集まってきた生徒や先生に発表していただいた。そういうような形でどんどん拡大されていっている。

脇町高校のことはご存じですか。脇町の先生もおいでになるので、説明していただいたらいいと思うのですが。そういうふうな形で、とくにボランティア活動、環境、あるいはいろいろな人権活動ですね。そういった面がどんどん高校教育の現場で浸透してきておるなという実感は持っています。

社会科というよりも主に特別活動の中で、そういうようなことが行なわれていると把握していいですか。

(教育委員会の湯浅氏より)教科の中では時間も限定されています。活動という面になってきたら、たしかに特活ですね。今言ったホームルーム活動とか、あるいは学校行事とかそういった場面での活動が多いのではないかと。ボランティアにつきましても、たとえば家庭科とかいろいろなところでボランティア教育という形で実践はしておりますが。具体的に外へ出て行って活動という段階になってくると、たしかに特活の場面が多いかなという気はしております。学校によって状況は違うと思いますが。

ひのみね養護学校の湯浅と申します。現代社会の研究員で児童権利条約について担当させていただきました。NGOについては私もすごく関心があります。やはり条約が国連で採択されても、それを実施することは非常に困難である。けれども、それは多くの人々の熱意と工夫で実現していくんだということを感じます。

児童権利条約につきましても、NGOが日本国内でかなり活発に活動してきたということを書物等で知ることができました。私は養護学校の教師で子どもたちの数も少ないために十分なことはできていないのですが、昨年、文化祭の活動として、いろいろなNGOの団体から数多くの資料をとり寄せ、それらを文化祭のときに展示するというようなことを

やってみました。ちょっとした糸口にはなったかなという感じもしております。

私も教師ではなくて、一般市民です。市民活動のようなものを行っています。国際的な緊急医療に携わっている方とか、外国に出ることが多い人たちが周りにいるものですからよく考えさせられるのですが、そういう人たちというのは非常に情報量も豊富ですし、経験量も豊富です。お話をしていたら飽きないし、その人から世界が広がっていくことが多いのですね。

実際、国連というのは私にとっては雲の上の存在だったのが、その方たちとお話をするようになって初めて、ああ国連というものも知っておかないとこの方たちとは付き合えないなというか、国連を知らないで世の中を知ったふうなことは言えないぞという実感がわいてきて、勉強するようになりました。

高校生たちというのは本当にいろいろな可能性を持っているし、いろいろなことを知りたがっている時期です。たとえば経験量とか情報量の豊富な一般の方を講師のような形でお迎えしてお話をさせていただくとよろしいんじゃないか。そのお迎えした講師の方の中にも、その方なりの限界とか、一般市民としては一人ではやれない限界とか壁というものがあったりするんだと思うのです。そういうところからお話を広げてもらう。ここでは国連が助けになるぞ、国連というのはそういう人たちにとって強い味方になってくれるぞとか、そういうふうを広げる。上からでなくて、いちばん底辺にいる人たちが力の限界を感じたときに、国連に対して向かっていくような、下から上への国連へのベクトルの向き方というものもあるのではないかなと思うのですが。

一般の人たちを講師に迎えて授業をされるとか、そういうふうなことについて、高校の先生方はどういうふうにお考えでしょうか。

(教育委の湯浅氏より) 実際はやっているのですよね。組織図からだけではなく、いわゆる手で触れることのできる国連。現場で作業している国連を教えることというのはなかなか難しい。しかし先ほど言った脇町高校の例などもあります。それを拡大すること、また今ご発言いただいたようなこともたいへん重要でしょう。

教育委員会は、外部講師招聘授業というのをやっております。私は担当でないのですが、具体的なことはわからないのですが。国連には限りません。いろんなことについて外部の方を講師としてお招きして、授業をしていただく、指導をしていただく。そういったことは各学校で現実にかなりやっております。これについては学校の先生方からのご発言を頂けれ

ばと思うのですが。

脇町高校の栗飯原と申します。先ほど湯浅先生のほうからお話いただいたので、ちょっと脇町高校のケースについてお話をさせていただこうと思います。脇町高校では授業実践という形ではなくて、やはり生徒の自主活動となります。

特定の知識を持たれた方を講師としてお招きして、お話しを伺い、生徒にそれについての小論文を書かせる講座のようなものを開いております。例えば山川の吉田医師。この方にはザンビアでの援助活動、あるいはパプアニューギニアの津波の際の援助活動についてお話をさせていただきました。また徳島県で自然環境を守る活動をされている方をお招きして、講演をさせていただきました。吉田医師に関しましては、ザンビアの現状を聞いた生徒の中から、私たちにできることをやっいていこうというような形で、自主的な活動が生まれております。

外部からお招きした講師のお話しに感銘を受けた生徒が、自分もそうした活動に参加していく。そうしたことは、ものすごく教育の活性化につながると思うのですが、やはり学校の中でそれを組織だてて、系統だててやっっていくというのは難しい。継続的に面倒をみていく顧問の先生だとか、そういうスタッフに余裕がない。今、体育の部活動、文化部の部活動、それ以外にもいろんな自主活動がいろいろ立ち上がってきているのですが、それを全面的にサポートしていくというのはちょっと難しい面もあるのです。

もちろん、そういった活動がもっと起こってきたらいいなと、私自身は思います。

(妹尾)国連広報センターの職員が中学校、高校で話をするということもあります。要請があれば、小学校へも行きます。

私は以前、パレスチナ難民救済事業機関というところにいました。日本の貢献というのはあまり日本では報道されていないのですが、小麦粉を送っているのですね。その小麦粉がいかに重宝されているかというようなところからお話をすると、小学生たちが興味を示したりするということがあります。

またこれは別な話なのですが、ジェット・プログラムというのがあって、英語教師のアシスタントをしている若い外国人の先生が「いろいろと国連のことを教えたいのですけれど…」ということで、広報センターに国連の扱っている問題に関する資料を請求されてきます。私どもとしては、積極的に資料を提供させて頂いております。

(司会)もう時間もあまりありませんので司会から、まとめの意味も含めて、最上先生にご質問させていただきたいことがあります。先ほどのアンケートでもございましたが、国連に対するイメージとして良いとも悪いとも言えない、わからないという生徒が多い。それは、やはり国連と日本との関係、そのつながりが見えてないということがかなり大きいと思うのです。

もっと言うと国連と自分とのつながりというのが見えてない。自分と国連、地域、国というものが一本の線につながったときに、国連が非常に身近に感じられるのだと思うのですが、国連の一加盟国の日本において、私たちが国連を考える際の正しい視点とは、果たしてどうあるべきなのかということについて、ご教示いただければと思うのですが。

(最上)すごく難しい質問だと思います。基本的に言えることは、戦後日本にとって多国籍外交というものがほとんど問題になってこなかった、ということです。この現実が大きく影響していると思うのです。戦後日本にとっての外交とは日米関係だけで、それ以外には何にもなかった。日米関係、日米の友好は大事なことです、アメリカとさえうまくやればいい、アメリカを怒らせさえしなければいいという姿勢だけを保っていますと、ほかの多くの国と問題を起こさないようにしなければならない、うまくやればならない、という感覚がほとんど育たないだろうと思います。

言ってみれば、日本の上にあるアメリカだけ上目使いで見れば国際社会で生きていけるかのような錯覚が生まれるのではないのでしょうか。アメリカとの友好関係を保たなければならないというのは、原則論としてはその通りなのですが、それを越えた難しい問題をはらんでしまったなと思うのですね。

その中で、アメリカではない国が183もある国連でどうあるべきかなどということイメージしろと言っても、そもそも無理な注文ではないかとも思うのです。183の国の大部分、160以上の国が日本では考えもつかないような生活条件の劣悪さの中で苦しんでいます。核兵器も持たず、膨大な軍隊も持っていない国です。それらの国々に対してこの国の若い世代はどういう関心を持てるのだろうか、どういう共感を持つことができるのだろうか。どういう理解を示すことができ、どういう敬意を払えるのだろうか。そう考えると、実は心の寒くなるものがあるわけです。

その現実を一度全部見たほうがいいのではないかと。上目使いに自分より大きな国だけ見ていたけれども、その世界像がいかに歪んでいるか それを自分でもわかっておかないとこれからの複雑な世界では生きていけないように思うのです。まずそれをきちんとわかる

う。それをわかるために手っとり早い方法が、国連を見るということなのです。国連が抱えている問題、国連が解決できない問題を全部見ていくと、我々が今どういう世界の中に生きているかわかります。それを本当にわかった、若いやわらかい感性の中から、「これではダメだからなんとかしようよ」という子どもたちが何割かは出てきます。私の経験で言いますと、何割かは必ず出てきます。みんなにそうなれというのは無理ですが、その何割かに賭ける以外にないのではないのでしょうか。

ただ、今の日本の外交の枠組みに乗っただけの世界認識では、その可能性のある何割かすらも出てこない。これではダメだから、せめてその機会を与えることが必要ではないかな、という気がするのです。

(司会)ありがとうございました。最後に一言ずつパネリストの方から頂きまして、この会を終わらせていただきたいと思います。

(妹尾)社会科学会の先生方の研究発表と最上先生のすばらしい講演を聞きまして、私ども国連広報センターも学ぶところが本当に多くありました。私ども国連広報センターも日本国内での広報ということで日々悩んでおりますが、先生方も悩んでいらっしゃるということで、お互いに協力していければと思います。

きょうはこのような研究会の場を国連教育シンポジウムということにさせていただいて本当にありがとうございました。私個人としても本当に初めての教育シンポジウムということでしたので少し緊張しましたがけれども、こういうような形でできましたこと本当に喜んでおります。

ニューヨークのほうにも、本日のシンポジウムについて報告させていただくつもりであります。皆様、ありがとうございました。

(徳元)今回研究員をさせていただいて、研究員をしていなかったら読まなかったと思うほど本を読んだと思います。これを機会に国連のことをどんどん勉強していきたいと思っております。ありがとうございました。

(最上)長時間ありがとうございました。本来ならば非常にマイナーな地位しか占めていないだろう国連の問題のためにこういう研究の場を持ってくださったということ、私も高校生を受け入れる大学にいる者としてお礼を申し上げたいと思っております。

いろんな制限やら限界やらというのはあるだろうと思いますが、お一人でも多くの先生方が「これはおもしろいぞ」と思うようになっていただければと思います。「国連というのはおもしろいぞ」と思う中で、生徒とのやり取りの中でもいつも保っていたきたいのは、国連について何かを聞いたときにそれは本当かなと疑ってみる、勉強するときの基本的態度です。例えば国連が湾岸戦争を始めて、「よくやった」「よかった」とみんなが言っているときに、「本当にそうだろうか」と思って欲しいのです。

あるいは、国連がボスニアで何もやらなかったとある人々が言う。「弱腰で困ったものだ。早く武力行使しろ」とみんなが騒いでいるときに、「本当にそれで良いのか」と思って欲しいのです。本当にそうなのかと思うところに、今の世界が抱えている複雑な問題が見えてくると思います。

もう一つは国連の大きな会議場がテレビに映されるたびに、これも「本当だろうか」と思って欲しいのです。安保理やら総会やらで様子の立派な各国の外交官だけが麗々しく映る。庶民とは関係ないという顔をした人もいるかもしれません。たしかにそれも国連の一面ですが、国連の別の部分は、世界中のあちこちで地道に働いている人以外の何ものでもないのです。テレビに映らないそのところをぜひ見て欲しいと思います。そうしますと、それに対してやわらかい感性で応えてくれる生徒、学生というのはかならず増えてくるような気がします。

私も今日皆さんから伺ったことを参考にして、また大学の教育の現場に戻りたいと思います。今日はどうもありがとうございました。(拍手)

国連教育シンポジウム in 徳島

国連をどのように教えるか

発行日：1999年2月

発行：国際連合広報センター

〒150-0001

東京都渋谷区神宮前5-53-70

国連大学ビル8階

電話(03)5467-4451

FAX(03)5467-4455

<http://www.unic.or.jp/>

E-mail: unictok@blue.ocn.ne.jp
